

# 情意的立場から合理的立場への「視点」の転換による概念の獲得

—小学校第3学年「地域の特産物」を事例にして—

Acquiring a Concept by Changing from an Emotional to a Rational Standpoint:  
Case Study of a Lesson in the 3<sup>rd</sup> Grade of Elementary School on “Special Products of the Area.”

小田 浩平  
(篠山市立味間小学校)

## I 問題の所在

これまで体験的、問題解決的な学習が重視されてきた小学校社会科においても、社会の見方、考え方となる概念を獲得させるための、科学的な方法による探究学習が求められている。

平成20年版『小学校学習指導要領解説社会編』には、第3学年、第4学年「地域の発展に尽くした先人の働きについての理解できるようにする」<sup>1)</sup>、第5学年「産業に従事している人々の工夫や努力を理解できるようにすること」<sup>2)</sup>、第6学年「人物の働きを共感的に理解できるようにすること」<sup>3)</sup>の記述がある。

このような、「理解」を基本原理とする小学校社会科<sup>4)</sup>について、二階堂年恵は、次のように述べている。

社会的事象を人間の行為の所産であるにとらえ、それを把握するためには、行為者の意図、目的、動機を知ることが必要であると考え。そのため行為者に対して、「共感」「感情移入」することにより行為者の意図、目的、動機を把握し、なぜ行為者がそのような行為を行ったかを探究することになる。<sup>5)</sup>

池野範男は、このような「理解」による社会科授業の利点と課題について次のように述べている。

子どもたちに活動内容に関して批判的吟味をせず、社会的役割や態度として受容させている。(中略)理解を基軸とした社会科は個人のレベルから認識をはじめるので社会認識が子どもたちにしやすいという利点があるが、理解は個人の行為レベルに留まり、社会全体レベルの認識に至らない<sup>6)</sup>

このように、共感による理解は、他者の活動内容について、批判的吟味をすることなく受け入れるため、「人々の工夫は、すばらしい。困難を乗り越えた努力や働きもすばらしい。」という情意

的な学習になりがちであった。個人の行為レベルの認識にとどまることなく、社会のしくみを認識するためには、社会の見方や考え方となる概念を獲得することが求められる。

米田豊は、社会の見方や考え方となる概念を獲得するための、「工夫と努力」の扱いについて、次のように述べている。

人々の「工夫と努力」を科学的に扱うことが大切である。しかし、人の顔が見えない実践では、無味乾燥な授業となる。人々の「工夫と努力」への共感から授業が始まっても、「原因と結果」の分析的思考で収束させることが大切である。<sup>7)</sup>

つまり、子どもが認識しやすい「共感」による理解から出発しても、その共感を科学的な方法によって「分析」する探究過程に組み込むことができれば、社会の見方、考え方となる概念を獲得していくことが可能となる。

以上のことから、本研究では、理解を基本原理とする小学校社会科の課題を克服するために、共感の段階を科学的な探究過程に組み込むことで、概念の獲得を可能にする手立てを明らかにする。その上で、小学校3年生における授業モデルを構築することを目的とする。

## II 立場の「視点」

ここでは、共感から分析に至るための、科学的な探究過程について論じる。

佐伯胖は、あらゆる知性の根源には「共感」があるとし、次のように述べている。

ただ主観の赴くままに任せるわけではなく、むしろその事物のもつ制約の厳しさを実感して受け入れるという点で、明らかに、「客観性」(自らの恣意性ではなく、対象世界が「そうならざるをえない」制約や法則に従って

いること)を「自分事」として実感しているのです。<sup>9)</sup>

佐伯の述べる共感とは、情意による主観的な理解だけを意味するのではなく、その事物のもつ制約や法則を受け入れた客観的な社会に関する認識も含み込んでいる。このような客観的な認識に関わる共感と関わりが深い考え方として「視点」がある。佐伯は、「視点」について、次のように述べている。

「視点」というのは、常に「誰か」の視点なのである。その「誰か」は、たしかに何らかの活動をしようとする意図しており、何かについて関心をもっている。その意図や関心を類推しながら、次々と情報を選択的に処理し、いろいろな刺激の流れを、その活動主体の目的、意図、関心事との関連のうちに位置づけるのである。<sup>9)</sup>

佐伯の述べる「視点」とは、誰かの「立場になる視点」である。認知心理学の研究成果によれば、この「立場の視点」は、動かすことによってこそ客観的な認識が可能になる。「視点を動かすこと」の機能は次の3点に、まとめることができる<sup>10)</sup>。

- |   |
|---|
| ①視点を動かすことは、対象に対する問いや仮説を生成する。                                    |
| ②視点を動かすことは、対象認識のほかに、それを見ている自己の視点のあり方についての認識(視点認識)を伴い、自己を相対化させる。 |
| ③視点を動かすことは、知覚できることにとどまらず、概念理解においても認識を深める。                       |

視点を動かすことによって、問いや仮説を生み出し、自己を相対化させ、概念を理解することができれば、視点を動かすことは、科学的な方法による探究過程において有効な授業方略となる。

共感的な理解から社会の見方となる概念を獲得させた事例として、佐藤章浩の実践研究があげられる。佐藤は、仮説的推論を用いた「立場の視点」の転換によって、小学校3年生段階では難しいとされていた経済概念の獲得に成功している<sup>11)</sup>。

佐藤は、「消費者から販売者へ視点を切り替えさせていくことが有効である」とし、次のような「立場の視点」の「取得・切り替え・統合」をおこなっている。

- |      |                  |
|------|------------------|
| 第1段階 | 消費者の視点の取得        |
| 第2段階 | 消費者から販売者へ視点の切り替え |
| 第3段階 | 販売者の視点の取得        |
| 第4段階 | 消費者・販売者の両視点を統合   |

ここで、消費者と販売者の視点について分析する。第1段階の安売りを望む「消費者の視点」は、

個人の行為レベルの認識にとどまる「立場の視点」である。それに対して、第3段階の消費者の視点を批判する販売者の視点は、社会全体の認識につながる経済概念の獲得を可能にする「視点」である。つまり、共感的な個人レベルの認識から始まっても、「視点」を転換すれば、社会全体の認識に至っていることがわかる。

ここで、「立場の視点」の転換が、概念の獲得とどのように関連しているのかを明らかにするためには、個人の行為レベルの認識にとどまる「視点」と社会全体のレベルの認識に至る「視点」とレベルの異なる二つの「立場の視点」を分類することが必要である。

宇佐美寛は、人の行動と概念の意味について、次のように述べている。

どんなバケツでも極微小の穴はあいているのであるが、そのような分子レベルのことが通常は問題にならないのは、「バケツで水を運ぶ。」という観点でバケツを見ているからである。書いたり運んだりする行動的なかまきが先にあるから、これらの概念は成り立つのである。<sup>12)</sup>

また、概念を成り立たせるために必要な分析について次のように述べている。

思考分析は、自己完結的ではなく、おしつめると母体であり意味の基準が発生する基盤である行動の分析が問題になってくるはずである。<sup>13)</sup>

このように、人の行動を分析することで、概念に対する行動の基準が発生する。(宇佐美の述べる意味の基準を、本研究では、「立場の視点」から発生することを重視し、行動の基準と呼ぶ。)このような人の行動が、社会事象の意味を理解するための根底にある。

社会学者アルフレッド・シュッツ (Alfred Schutz) は、行動と行為の関係について、次のように述べている。

「学校に行く」という行為は、未来に「学校に到着した」という完了の状態が、まずは文字通り未来完了的に投企されることで始まる。そうした状態が期待され思い浮かべられよう。そしてそのように投企された状態に、今=現在の時点から注意を向けつつ、と同時に、そこへと至るプロセスの中で種々に起こりうる諸々の行動、それは時々刻々、さまざまな出来事が発生し、それらにも時々刻々注意が向くことになるので、さまざまな行動ということになるが、これらが順次整序されていくことにより、ひとつの行為過程がなると、行為が完遂される。<sup>14)</sup>

社会科では、様々な人の行為を学習する。この

とき、行為を分析することによって、行動を順次整序するための、行動の基準が明らかとなり、社会事象を「立場の視点」から認識できる。

シュッツは、この行為について、情緒にしたがう行為と、合理的熟慮にしたがう行為の二つに分類している。このうちの合理的熟慮にしたがう行為については、その行為者のもつ目的に基づく体系的な計画を知っており、その行為が、行為者にとって、どのような意味連関の上に成り立っているのかがわかることを前提としている<sup>15)</sup>。

このような合理的熟慮にしたがう行為者の「視点」は、これまで批判を受けてきたような情意による「立場の視点」とは、質の異なる「視点」である。合理的熟慮にしたがう行為者の「視点」とは、行為者の意図や目的を達成するための様々な行動を制約や体系的な計画の中に位置づける合理的な「立場の視点」であるといえる。

以上のことから、本研究では、「立場の視点」を次の二つに分類し、定義する。

<p>「情意的立場の視点」 人物への共感に基づく、情意的な行動の基準をもつ視点</p> <p>「合理的立場の視点」 社会諸科学の研究成果である概念に基づく、合理的な行動の基準をもつ視点</p>
--

### Ⅲ 探究過程における「視点」の転換と概念の獲得のモデル

#### 1 複数の視点と概念

社会科で獲得すべき概念とは、目に見えない社会事象間の関係を説明するものである。荻谷剛彦は、概念には、「複数の視点」によってとらえられるものがあるとし、「過労死」を例にして次のように述べている。

過労死は、ひとりの人間の死という実体を越えて、「働かせる側の問題と働く側の問題の複合によって作られた問題である」、という問題自体のとらえ直しを通じ

て登場した告発的な概念です。<sup>16)</sup>

「過労死」のように、複数の「立場」の間にある概念を獲得するためには、立場を転換し、それぞれの立場から社会事象を捉えることが必要不可欠となる。佐藤の実践における経済概念についても、経済活動は、販売者と消費者の双方の立場が関係していることから、両方の立場からとらえることが求められる。

#### 2 「仮説的推論」と「なぜ疑問の発見・把握」

本研究では、「視点の転換」は、科学的な方法による探究過程に有効に機能しているとの仮説に立ち、佐藤の実践を手がかりにして、「立場の視点」の転換と探究過程との関連を分析検討する。ここでは、二つに分類した「情意的立場の視点」と「合理的立場の視点」を抽出し、分析することにする。

なお、科学的な方法による探究過程については、数ある探究学習の中でも、「習得した知識（取得した「視点」）を活用する場面」を明確に組み込んでいる米田豊の「探究Ⅰ」の授業構成理論に依拠することにする。<sup>17)</sup>

科学的な方法による探究過程の始まりは、「なぜ疑問の発見・把握」である。始めに「なぜ疑問の発見・把握」と「立場の視点」との関連を明らかにする。子どもが日常的な経験に基づいて取得できる「消費者の視点」とは、「安く買いたい」という「情意的立場の視点」である。もし、ここで、「情意的な販売者の視点」に転換しても「なぜ疑問」は発見されない。

それは、「情意的立場の視点」を転換させても、「安売り」の知識を批判せず、「販売者は、消費者が喜ぶように安売りをしている」という日常的な認識にとどまるからである（図1）。

日常的な認識を乗り越えるために、佐藤は仮説

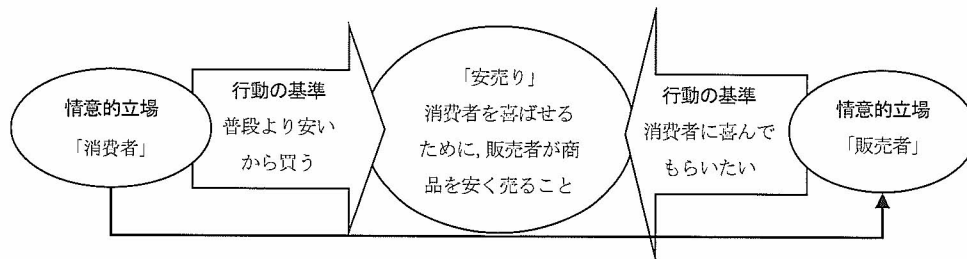


図1：「情意的立場の視点」の転換による「安売り」の知識

的推論を用いている。佐藤の述べる仮説的推論とは、「複数の立場が調和を保っている現実社会の枠を離れ、独立した立場から社会事象をとらえることで、仮定して考えた見方や解釈と、現実とのズレを認識することができる」という手だてである<sup>18)</sup>。日常的な認識のまま「視点」を転換することと、仮説的推論によって「視点」を転換することの違いは何か。それは、「情意的立場の視点」の行動の基準から「理想の状態」を生み出していることである。

吉水裕也は、問題とは、「あるべき姿」と「現状」との「ギャップ」を認識することによって、発見・把握されると述べている<sup>19)</sup>。仮説的推論とは、情意的立場の視点から、「理想の状態」を子どもに考えさせ、情意に基づいた極端な状態を想起させることで、現実とのギャップを把握させ、問題を発見・把握させるための手法であるともいえる。

佐藤は、子どもに、「無制限の安売り」を理想の状態としてとらえさせた後、「本当にそうでしょうか」と問いかけることで、「現実の安売り」とのギャップから、子どもに「なぜ、無制限の安売りがだめなのか」という疑問を発見、把握させている。

以上のことから、「情意的立場の視点」から「理想の状態」を想起させ、「現実の状態」とのギャップを認識させることができれば、「なぜ疑問」を発見・把握させることができる。

### 3 異なる立場への「視点の転換」と「予想・仮説の設定」

次に、「視点の転換」と「予想・仮説の設定」との関連を明らかにする。理想と現実のギャップによって「なぜ疑問の発見・把握」した場合、子どもは、一方の立場からの極端な「理想の状態」を批判するために、一旦異なる立場へと視点を転換し、「もし、そうなったら異なる立場はどうなるか」という仮説的推論をすることで予想や仮説を立てることができるようになる。佐藤実践の場合、この転換によって、子どもが、無制限の安売りを批判し、「販売者の給料が支払われなくなる」などの、予想、仮説を設定することができている。

### 4 「合理的立場の視点」の取得による「説明的知識の習得」

「資料の収集・選択・検証」の段階では、「合理的立場の視点」を取得させることができる。教師が、資料によって、子どもに販売者側の行為（商品の仕入れ、給料の支払い、設備の維持）に着目させ、販売者の行動を体系的な計画（利潤の追求）の中に位置づけさせる。その結果、経済活動における合理的な行動の基準として、「原価」と「利潤」の概念を獲得する。そして、経済概念が組み込まれた「合理的な行動の基準」によって、なぜ疑問の解としての説明的知識が習得されることになる。

探究過程と「視点の転換」による概念の獲得との関連で、明らかとなったことは、次の3点である。

- ①「情意的立場の視点」から「理想の状態」を想起させ、「現実の状態」とのギャップを認識することができるのであれば、「なぜ疑問の発見・把握」につながる。
- ②「なぜ疑問」に対する「視点」の転換は、一方の情意的立場から見た「理想の状態」を批判するため、「予想・仮説の設定」に有効である。
- ③予想、仮説の検証によって取得した「合理的立場の視点」には、社会全体の認識を可能にする概念が組み込まれている。

以上のことから、「情意的立場の視点」から「合理的立場の視点」への転換は、探究過程に有効に機能し、概念の獲得を可能にすることが明らかとなった。これまで論じてきた「視点」の転換と探究過程との関連モデルは、図2のようになる。

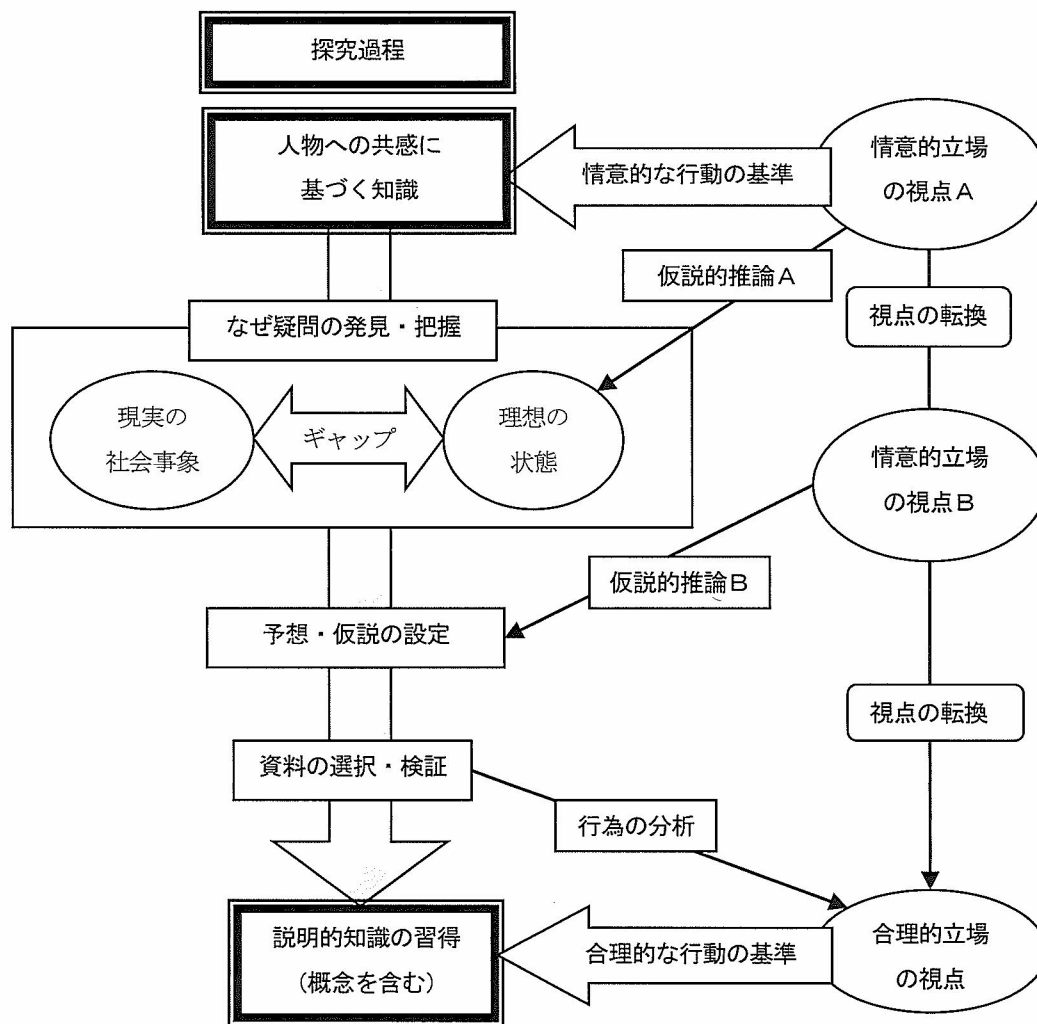


図 2：探究過程における「視点」の転換と概念獲得のモデル

## V 探究過程における「視点」の転換を組み込んだ社会科授業開発

### 1 小学校3年生単元「地域の特産物」における「視点」の転換

探究過程における「視点」の転換と概念獲得のモデルに基づき、小学校3年生単元「地域の特産物」の授業モデルの開発を行う。

兵庫県篠山市の特産物である黒豆は、篠山市のほとんどの農家が栽培しており、他の特産物と比較しても生産量が多い。本単元では、農家の人々による黒豆の栽培を通して、「需要と供給」の経済概念を獲得させることを目的とする。

本授業モデルの指導は、全四次10時間で行う。

第一次では、篠山市の黒豆の生育についての知識の習得と並んで、日常生活と黒豆との関わりを、家庭での聞き取り調査などで十分に理解させ、

「情意的立場の視点B：消費者」を取得させる。

第二次では、黒豆作り農家の人々の工夫や努力をミクロに学習する。共同で機械を使っていることなどから、農家は「できるだけお金や手間をかけずに、おいしい黒豆を栽培している」という「情意的立場の視点A：黒豆作り農家の人々」を取得させる。

第三次では、まず、「なぜ疑問の発見・把握」をさせるために、第二次で取得した「情意的立場の視点：「黒豆作り農家の人々」を応用し、「できるだけ手間やお金をかけずに、立派な黒豆を収穫するために、もし、どこかの作業をなくすとすれば、どの作業がなくなるだろうか」と仮説的推論させることで、子どもに「理想の収穫」に着目させる（仮説的推論A）。

黒豆作り農家の人々にとって、お金や手間をか

けず、おいしい黒豆を収穫するためには、乾燥の作業がない方が理想である。自然乾燥によって1月の終わりに収穫すれば、乾燥機のお金も、手間もかからず、裂皮や割れ豆がほとんどない立派な黒豆を収穫できる。

しかし、「現実」には、11月の終わりに収穫している。11月の黒豆は、まだやわらかく、稲木などに干して、予備乾燥させた後、乾燥機を使う。乾燥は、乾燥機を借りるお金が必要なだけでなく、急な乾燥によって、皮が裂けたり、豆が割れたりしないようにと最も注意が必要で、手間のかかる作業である。

ここで、理想と現実の間にギャップが生まれ、「なぜ、黒豆作り農家の人々は、1月の終わりには自然乾燥し、収穫できるのに、お金も手間もかかり、裂皮や割れ豆が出るのに、11月の終わりに収穫（現実の収穫）するのだろうか。」というなぜ疑問を発見することができる。

次に、「予想・仮説の設定」のために、子どもに、「本当に、全ての黒豆を1月の終わりに収穫してしまおうか。」と問いかける。

この時、子どもは、生産者から消費者へと「視点」を転換し、「もし、全ての黒豆を1月の終わりに収穫した場合は、どうなるだろうか」と、消費者の立場から、仮説的推論することになる。（仮説的推論B）

子どもは、第一次の学習によって、黒豆の煮豆を正月に食べることを知っているので、「正月の煮豆で食べる人が多いので、12月中に出荷する方が、たくさんの黒豆が売れるのではないか」などの仮説を設定することができる。仮説的推論による「予想・仮説の設定」によって、個人レベルの「情意的な農家の人々の視点」から、「情意的な消費者の視点」へと、転換した上で、さらに黒豆の販売時期（需要）を意識した「合理的な農家の人々の視点」の取得へと向かうことになる。

「資料の選択・検証」段階においては、正月の黒豆の需要に合わせて、「12月までの出荷量を多いことを示す資料」や「早く出荷する方が高く売れることを示す資料」を提示することによって、「生産者は、消費者のほしい時期（需要）に合わせて、出荷（供給）すれば、高く売ることができ

るので、収穫時期を調整していること」がわかる。この検証によって、「需要と供給」の経済概念に基づいた行動の基準を持つ「合理的立場の視点：黒豆作り農家の人々の視点」を取得することができる。

仮説を検証する資料を読み取ることで、社会全体レベルに関わる認識することができれば、「なぜ疑問」の解として、「黒豆作り農家の人々は、乾燥にお金や手間がかかっても、消費者がほしがる正月の時期に合わせて、出荷すれば、たくさんの黒豆が高く売れるので、11月に収穫している。」という説明的知識が習得され、下線部のような「需要と供給」の経済概念が獲得される。

以上のことから、農家の人々への共感による理解から始まっても、科学的な方法による探究過程の中で、「視点」を転換させることによって、概念が獲得されたことになる。

これまで論じてきた、「地域の特産物」の探究過程における「視点の転換」と概念の獲得は、図3のようになる。

最後に、単元「地域の特産物」の全体計画にあわせ、「視点」の転換が組み込まれている第三次第9時についての指導案を示す。

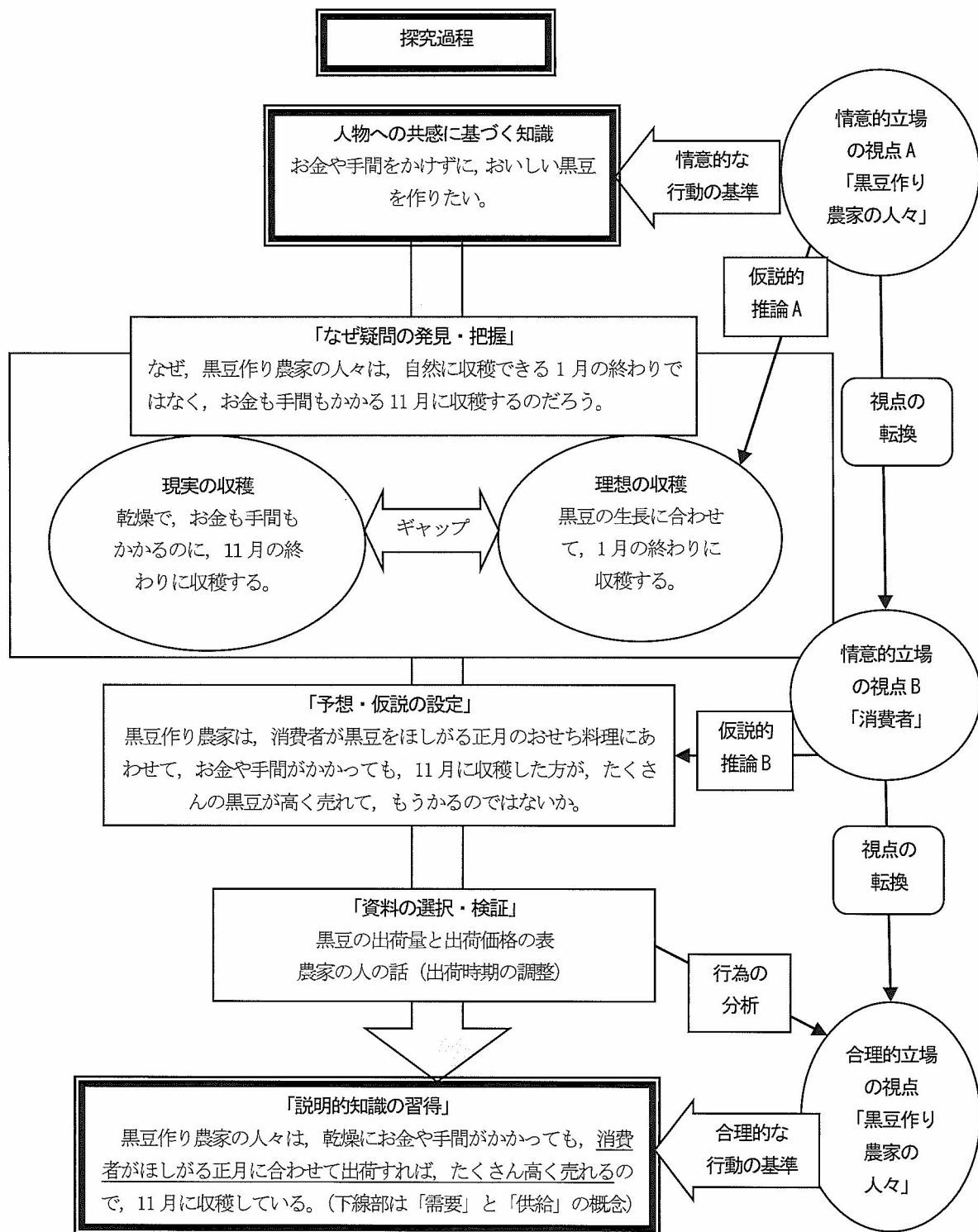


図3：小学校3年生単元「地域の特産物」における「視点」の転換と経済概念の獲得

2 「地域の特産物」における単元計画

次	時	目標	「視点」の取得	習得する知識
第一次	第1時	・篠山市で、たくさんの黒豆が作られているわけについて、学習していく計画を立てることができる。		・篠山市では、様々な特産物の中でも、黒豆が最も広い面積で作られている。
	第2時	・篠山市の黒豆の消費時期や、他の商品にも「丹波篠山黒大豆」の名前が使われていることを理解する。	●情意的立場の視点 「消費者：正月に、おいしい黒豆の煮豆を食べたい。」 (家庭での聞き取り調査など)	・正月のおせち料理で、黒豆の煮豆を食べる。 ・丹波黒大豆は、他の商品にも名前が使われている。
	第3時	・篠山市の自然条件が、黒豆作りに向いている理由を説明することができる。		・篠山市は、標高の高い盆地で、昼夜の気温差が大きい。また、土は粘土質で保水力がある。篠山市の自然は黒豆作りに向いている。
第二次	第4～8時	・篠山市の農家の人々の黒豆作りの様子を見学し、聞き取り調査をすることで、黒豆の栽培に関する工夫や努力を理解する。	●情意的立場の視点 「黒豆作り農家の人々：毎年、おいしい黒豆をできるだけ、お金や手間がかからないように、工夫しながら栽培し、確実に収穫している。」 (黒豆作り農家の見学、聞き取り調査)	・農家の人々は、確実に芽が出るように、黒豆のへそ（根が伸びる所）を下に向けてまいていることや、台風で黒豆の枝が倒れないように支柱を立てているなどの工夫をして、大きくておいしい黒豆を育てている。 ・共同で機械を購入し、少ない費用で手間をかけずに、栽培している。
第三次	第9時本時	・黒豆作り農家の人々が、お金も手間もかかるのに11月に収穫する理由を説明することができる。	●合理的立場の視点 「黒豆作り農家の人々：収穫時期を早め、消費者のほしがる時期に合わせて、出荷することで、たくさんの黒豆を高く売ることができる。」 (「仮説の検証」による概念の獲得)	・黒豆作り農家の人々は、乾燥にお金や手間がかかっても、消費者がほしがる <u>正月の時期に合わせて、出荷すれば、たくさんの黒豆が高く売れるので、11月に収穫している。</u> (下線部：「需要と供給」の経済概念の獲得)
	第10時	・篠山市の黒豆がたくさん作られているわけについて、栽培や販売の工夫と結びつけながら理解する。		・黒豆作り農家の人々は、篠山市の自然条件をいかしながら、正月に間に合うように収穫すれば、高く売れてもうかるので、たくさんの黒豆を作っている。



(1)本時の目標

・黒豆作り農家の人々は、乾燥にお金や手間がかかっても、消費者のほしがる正月に時期に合わせ

て出荷すれば、たくさん高く売れるので、11月中に収穫していることを説明できる。(知識理解)

(2)本時の展開

段階	学習活動〔視点の応用と転換〕	発問(●)・指示(▼)	予想される子どもの反応(●)	資料
なぜ疑問の発見・把握	<p>1. 黒豆の栽培についての学習を思い出す。 〔情意的立場の視点：黒豆作り農家の人々の応用〕</p> <p>2. かかるお金や手間をへらせる作業について知る。 〔理想の収穫〕</p> <p>3. 現実の黒豆の収穫について知る。 〔現実の収穫〕</p>	<p>●黒豆作り農家の人々は、どのように黒豆を栽培していたでしょう。</p> <p>●もし、黒豆作りで、なくてもよい作業があるとすれば、どれだろう。</p> <p>▼黒豆作り農家の人の話を読んでみよう。</p>	<p>・立派な黒豆を作って、みんなに喜んで食べてもらいたい。</p> <p>・共同で買った機械で作業するなど、できるだけお金と手間がかからないように栽培しているな。</p> <p>・1月の終わりには、黒豆が自然に乾燥して、収穫できるな。</p> <p>・11月に収穫すると、乾燥にお金や手間がかかって、大変だ。</p> <p>・黒豆が割れたり、皮がさけたりすることもあるからもったいない。</p>	<p>資料1 黒豆の生育カレンダー</p> <p>資料2 黒豆作り農家の人の収穫の話</p>
<p>「なぜ、黒豆作り農家の人々は、1月の終わりには自然に乾燥し、収穫できるのに、お金や手間のかかる乾燥機を使ってまで、11月の終わりに収穫するのだろうか。」</p>				
仮説の設定	<p>4. なぜ、11月の終わりに収穫するのかを予想する。 〔「情意的立場の視点：消費者」への転換〕</p>	<p>●全ての黒豆を1月の収穫にしてみようか。</p>	<p>・篠山の黒豆は、正月におせち料理の煮豆にして食べるから1月の終わりに収穫したら間に合わないよ。</p> <p>・早く収穫する方が、たくさん高く売れるのかな。</p>	
仮説の検証	<p>5. 11月に収穫する理由を確かめる。 〔「合理的立場の視点：黒豆作り農家の人々」の取得〕</p>	<p>▼予想を確かめるために、資料を読み取ろう。</p>	<p>・篠山の黒豆のほとんど半分が、正月までに出荷されているね。</p> <p>・12月までに出荷するのが、一番高く売れるね。</p> <p>・農家は、できるだけ早く出荷して、正月にたくさん高く売れるように考えているね。</p>	<p>資料3 黒豆の出荷量と出荷価格</p> <p>資料4 農家の人の出荷の話</p>
説明的知識の習得	<p>6. 学習のまとめを書く。</p>	<p>▼農家の人々が11月に収穫するわけを書きましょう。</p>	<p>・1月の収穫では、<u>正月に間に合わない</u>ので、<u>高く売れないことがわかったよ</u>。</p> <p>・農家の人々は、<u>お金も手間もかかるけど、消費者がほしいときに、収穫して売ることがもうかるんだね</u>。</p>	
<p>習得する説明的知識 「黒豆作り農家の人々は、乾燥にお金や手間がかかっても、<u>消費者がほしがる正月の時期に合わせて出荷すれば、たくさんの黒豆が高く売れるので、11月に収穫している。</u>」(下線部は、「需要と供給」の経済概念の獲得)</p>				

## VI 研究の成果と今後の課題

本研究では、視点研究の成果に基づき、「情意的立場の視点」と「合理的立場の視点」の二つの段階に分類した上で、探究過程における異なる「立場の視点」の転換が概念を獲得する上で有効であることを明らかにし、授業モデルを構築した。

このことは、これまで小学校社会科において批判されてきた「個人の行為レベルにとどまる理解」を克服することにとどまらず、共感を「情意的立場の視点」として、積極的に科学的な学習方法に応用し、社会全体レベルの説明へと導く探究過程を構築したことを意味する。

今後の課題は、開発した授業モデルの有効性の実証とともに、「視点」の転換が、さらに広い分野においても応用可能であるかを研究していくことである。

### 【注および引用参考文献】

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』東洋館出版2008, p.70
- 2) 同上, p.70
- 3) 同上, p.70
- 4) 山田秀和は、「理解」が小学校社会科の基本概念であることを指摘している。「小学校社会科の内容と学習指導」『小学校社会科教育』, 学術図書出版, 2010, pp.134-161に詳しい。
- 5) 二階堂年恵「小学校社会科の内容と学習指導」『小学校社会科教育』, 学術図書出版, 2010, pp.86-109
- 6) 池野範男「理解」森分孝治・片上宗二編『社会科重要用語300の基礎知識』明治図書, p.98
- 7) 米田豊「産業学習：人々の工夫や努力の科学化」全国社会科教育学会編『社会科教育実践ハンドブック』明治図書, pp.57-60
- 8) 佐伯胖「人間発達の軸としての『共感』」佐伯胖編『共感－育ち合う保育の中で－』, ミネルヴァ書房, 2007, p.19
- 9) 佐伯胖『教育学大全集16 学力と思考』第一法規出版1982, p.74
- 10) 本研究における認知心理学の研究成果は、前掲の佐伯胖以外に、上野直樹、宮崎清孝の視点論に依拠している。詳細は、上野直樹「視点のしくみ」宮崎清孝・上野直樹『コレクション認知科学3 視点』東京大学出版, 1985, pp.1-100, 宮崎清孝「視点の働き」宮崎清孝・上野直樹『コレクション認知科学3 視点』東京大学出版, 1985, pp.101-176を参照
- 11) 詳細については、佐藤章浩「小学校社会科における経済概念の形成－第3学年単元『スーパーマーケットのひみつをさぐる』を事例に－」『社会科研究』第73号, 全国社会科教育学会, 2010, pp.41-50を参照
- 12) 宇佐美寛『教育において「思考」とは何か－思考指導の哲学的分析－』明治図書, 1987, p.91
- 13) 宇佐美前掲書 p.57
- 14) 森元孝『アルフレッド・シュッツ－主観的時間と社会的空間－』東信堂, 2001, p.71
- 15) 詳細については、アルフレッド・シュッツ著 森川真規雄 浜日出夫訳『現象学的社会学』紀伊国屋書店, 1980, pp.103-111を参照
- 16) 荻谷剛彦『知的複眼思考法－誰でも持っている想像力のスイッチ－』講談社+α文庫, 2002, p.275
- 17) 米田豊『「習得・活用・探究」の社会科授業作りと評価問題』米田豊編著『「習得・活用・探究」の社会科授業 & 評価問題プラン小学校編』明治図書, 2011, pp.7-21
- 18) この仮説的推論の考えについては、岡崎誠司『社会科の発問 If-Then でどう変わるか』明治図書, 1995に詳しい。
- 19) 吉水裕也「社会科における学習課題をめぐる理論」岩田一彦編著『小学校社会科 学習課題の提案と授業設計－習得・活用・探究型授業の展開－』明治図書, 2009, pp.22-35